

## セントルイス・ワシントン大学 留学だより

Washington University in St. Louis

佐藤 一仁

(東京大学腫瘍外科)

上原記念生命科学財団からリサーチフェローシップ（海外推薦）を受け、米国ミズーリ州セントルイスにある、ワシントン大学(WashU「ワシュー」と発音します)に留学しています。WashUは全米大学ランキングで毎年上位にランクインするトップレベルの教育機関で、多くのノーベル賞受賞者を輩出しています。

私は、Division of OncologyのLi Ding教授の研究室に所属しています。当研究室ではコンソーシアムによって全米から集められた腫瘍の大規模解析を行っており、私の携わっているプロジェクトでは、腎癌や大腸癌などの単一細胞解析を手がけています。具体的には、腫瘍組織を分離装置で単一細胞または単一核に分離してソーティングを行ない、単一細胞レベルでのRNAおよびATAC解析を行なっています。バイオインフォマティクスに長けている方には当研究室をお勧めしたいです。また、多数の抗体を共役し、一枚のスライドで免疫蛍光を可能とする、CODEX (Akoya Bioscience) という機械が、研究室に導入されました。当研究室は、そのような発展途上の科学に投資してサポートする余裕があるように思います。

留学して多くのプレゼンテーションを見る機会がありましたが、米国人のプレゼンテーション力の高さには驚きました。異言語の壁もあり、私はプレゼンテーションには毎回苦戦しています。渡米前にプレゼンテーションのトレーニングを積んでおくべきだったと痛感しています。さらにパンデミック以降、ミーティングは全てzoomで行われているため、教授と対面で話すことができずに苦労しています。WashUに所属する日本人留学生は優秀な方が多いです。日本人同士で分野を超えた研究のディスカッションをする機会も多く、日々刺激を受け、切磋琢磨しながら研究を進めています。

セントルイスの一部は治安が悪いと言われていますが、危険とされるエリアに立ち入らなければ基本的には安全です。現に私は危険な目には遭っていません。電車やバスなどの公共交通機関内でたまに奇声をあげる人が居て、恐怖を感じる事もありましたが、パンデミック以降はマスク着用が義務付けられたせいか、そのような経験をする機会は減りました。

セントルイスは日本と同様に、四季がはっきりしているように感じます。ただ、冬は寒く、摂氏-20度近くになる日もあります。現地の人は寒さに耐性があるのか、私が完全防寒で出勤した日でもTシャツ姿で実験する人を見かけます。ミズーリ州の家賃は米国の他の地域

と比べると安いと言えます。大学の徒歩圏内にスーパーマーケット、レストランの揃った住居エリアもあり、生活はしやすいです。しかし、日本のように公共交通機関は発達していないため、大学から離れた場所に住む場合には自家用車が必要になると思います。

最後に、留学をサポートしてくださった上原記念生命科学財団にこの場を借りて深く御礼申し上げます。



セントルイス・ワシントン大学玄関の壁に飾られているノーベル賞受賞者